

東北の城跡と温泉紀行

藤川昌寛

日程 2011年 5月13日(金) ～ 17日(火) 4泊5日
・メンバー 平田和久(古城評論家)・山本正隆(国際温泉評論家)、山本紀美子夫妻、川口昭博(レンタカードライバー)、阪田正博(自車ドライバー)、井上孝郎、倉橋政則、藤川昌寛・8人・いずれも広島大学山岳部OBで、信州鹿島槍ヶ岳山麓・青木湖畔に建つ鹿島クラブ(広島大学山岳部OB有志で作った二代目山荘)メンバーである。本計画は古城評論家・平田和久氏が城をリストアップし、これをベースに国際温泉評論家山本正隆氏が古城跡、温泉、宿舎、コースを決めて4泊5日の絶妙の北東北の旅に仕上げた。山本正隆氏は世界40ヶ国以上の温泉を探査し、20年近くもインターネットに発信を続け、06年に「世界温泉紀行6湯」を上梓された。海外実践済のレンタカー利用探訪方式が今回も採られた。先導車ナビは勿論山本正隆さんである。

盛岡駅集合 13日 14時。レンタカー一台と阪田車で、阪田車との待ち合わせは岩手山SAで 15時 30分であった。道順は岩手・秋田・岩手と反時計に回って盛岡駅で解散予定であった。

5月13日(金) 晴れ

初日 13(金)は岩手山SAで全員集合し 15時 30分発八戸自動車道を北東に向った。

① 一戸城と九戸城を探訪、

九戸城跡は国指定史跡であり、二戸の市街地を含む馬淵川・白鳥川・猫淵川の三河川に囲まれた室町年代創設の城域八五〇米×六五〇米広さの小高い段丘上の山城であった。

本丸跡、二の丸跡、三の丸跡が点在し、石沢館と若狭館が並んで一城の形をなす。現在は畑地として利用されている。一面に深い緑草が生え八重さくらの盛りであった。

今晚の泊りは、岩手の名湯・侍の湯と言われて来た金田一温泉(岩手県二戸市陸奥国)の「おぼない」割烹旅館だ。17時40分着。

計画書を見た時から、金田一温泉と聞くと胸をわくわくさせていた。金田一家は南部藩の氏族であり先祖は金田一を領地として与えられ、金田一姓を名乗るようになったと伝えられている。国語学・言語学者の金田一京助は、先祖が金田一周辺を領地にしていた関係でたびたび来訪している。

金田一京助はまた歌人でもあり、金田一温泉を詠んだ歌も残している。緑風荘前に歌碑(なつかしき故郷の丘の石のおも我が名を刻むとはのあかしに)があるそうだ。(時間の関係で不見)。

温泉は源泉かけ流し、泉質は単純温泉、弱アルカリ性で浸透圧分類では低張性、源泉かけ流しの浴槽端は茶黄色の鉱石のごとく堆積物が波うっていた。男七人が入っ

ても広く、湯治客に向いていると感じた。割烹旅館だけあって料理は食べきれない位だった。翌日早朝も入浴、浴室の外は木道があつて東屋、水車があつた。

翌朝、この宿の女将岩手弁でなごりおしそうに語り続ける。紀美子夫人に南部せんべいと、ちよつと日が過ぎたりんごを下さる。おぼない旅館前で女将も入つて全員の記事写真を撮る。今回もすべて、ポイントとなる事象の写真撮影は、山本正隆氏である。

今回、山本紀美子夫人が同伴された。山本紀美子夫人は、山本正隆（国際温泉評論家）氏とともに海外の温泉探訪を毎年経験され、国内温泉探訪にも主人に同伴される。スキーも大変お上手で毎年北海道ニセコ、信州白馬、鹿島槍、燕温泉周辺で楽しんでおられる。

その山本紀美子夫人がこの日、左記を詠う。

八重桜咲きてこぼるる城跡に集える友の笑顔清けし

山本紀美子作

5月14日（土）晴れ

昨日予定残しの

② 戸城へ、山城、馬淵川と熊原川との合流点にある標高百三十米、城域九百米×二百米の城山公園になっている。本日は北東北を東（八戸）から西（男鹿半島）へ北東北横断である。岩手県から秋田県鹿角市へ入る。

④ 大湯館（10時23分〜11時10分鹿角市和田大湯字和

田）平山城、城域六百米×四百米、雑草が繁茂、堀、本丸跡の看板がくすんだり、倒れている。清姫神社の隣

⑤ 小枝指館（11時〜12時25分秋田県鹿角市花輪古館）標高百五十米、中世創設、城域七百米×三百米舌状台地で、空堀で仕切つて複数の曲輪としている。

⑥ 小平館（12時〜12時25分）丘の周囲の田んぼ道を一週、空堀のところに駐車、近くの農夫に聞くも分からず。道はなく藪こぎ（道のない藪を手で押し分け上ること）。国道103号を西へ大館市へ向かう。途中田んぼの中の食事処で秋田名産・比内地鶏の産地「比内地鶏の親子井」を食べる（12時45分）。とても美味しかった。

⑦ 大館城（13時40分〜14時10分）大館市字中城・平山城、国指定史跡、城域六百米×四百米、城跡（本丸跡）は公園化（桂城公園）されている。鼓橋を渡つたところの秋田犬博物館を全員が見学した。内陸に別れを告げ、西へ約50km日本海側にでる。

⑧ 檜山城（15時30分〜15時45分）能代市檜山字古館、別名霧山城と言われた。城域百六十米×百五十米、標高百四十米、山城、国指定史跡だけあつて整備されていた。山道を車で強引に上がる。

⑨ 国道7号を40km走つて、山内城（南秋田郡五城目町山内）に到着。山城である。城域四百米×二百五十米、

戦国期創設。小倉温泉駐車場の奥側端から登るが、山の中はすでに獣道だ（山道として認められない獣だけが通れる道のこと）。

山内城一族郎党慰霊塔が雑草に埋もれていた。二つに別れた曲輪跡（城の一定の区域の周囲に築いた土や石のかこい）を上ったり下ったりし、歩き回る。

男鹿半島八郎潟干拓地のまっすぐ伸びた道路を 40 km 走って今夜の温泉・宿に着く。

今夜の温泉・宿は男鹿半島北側突端にある男鹿温泉郷の中の国民宿舎「男鹿」（男鹿市北浦湯本字中里 21 の 19）である。

井上孝郎植物博士指導で途中で採ってきた山菜の料理を頼むと、胡麻和えと茹でたものが食前に運ばれた。

さすが美味しかった、ここは親切だ。翌日の阿部旅館では断られた。夕食後入浴した。泉質は純弱炭酸食塩泉、飲用もできる。口にする和一寸しよっぱい。湯は熱くて半身浴のまま我慢する。浴槽にはしばらく経てからようやく入れた。皆引き揚げ、最後になった私はまだ入浴した。地元の若者が 2、3 人入ってくる。仕事を終えて来たのであろう、洗うことはあまりせず秋田弁でしゃべり続ける。湯船の中へはあまり入らず、半身浴を繰り返す。温泉が一日の最後の務めのようなのである。地元の人は近くにあつてうらやましい。

里人も知らぬ山城訪ねゆき道なき山路を君は登りき

耕運機動かす夫婦のみありて八郎潟の田んぼは広し
ふたり

山本紀美子作

5月15日（日）晴れ

朝飯前に、全員で「風山」へ行く。山麓から頂が見渡せる位置にくと、あちこちに地元の車があり、ほおかぶりの女性が山菜を取っている。

標高 355 m 周囲がすべて緑の芝生に覆われた休火山で、大潟村と入道崎がとりまいてる。

今回は雲に阻まれ見れなかったが、鳥海山が見える由。日本海と干拓地の眺望は、早朝だけに胸がすく思いだった。往復 1 時間だった。

朝食 8 時。8 時 40 分宿発。男鹿半島外周を反時計回りで進む。これは宿の勧めで男鹿半島西端の海岸線がすばらしいので訪れた。男鹿半島はなまはげで有名だ。まず入道崎（8 時 50 分〜9 時 05 分）だ。日本の灯台 50 選の入道崎灯台を見る。北緯 40 度の碑に立つ。日本海が濃紺で心なしか湾曲している。黒褐色の崖壁、波打ち際は白波がたつて、本旅行中一番の好天に恵まれた。この入道崎は夕陽鑑賞スポットで、夏は勿論、春秋冬人気があるそうだ。

はろばろと地球の丸さ思ひいる北緯四十度の岬に立ちて

山本紀美子作

男鹿半島西端の海岸線のドライブ。海岸線から高度を上げ、半島山間部に入る戸賀トンネルを抜けると一段と高い眺望が開け、高度を下げて青砂川が流れる賀茂湾の賀茂青砂がみられる。海岸線には白糸の滝、孔雀の窟、奇岩のゴジラ岩が散見できた。

⑩海岸に突き出た岬の上に「双六館」（9時45分〜10時）戦国期創設。波打ち際から岩を登りブッシュ（雑草木）をかき分け登るもブッシュの繁茂がひどく、時間を取るので平田古城評論家は諦める。

⑪男鹿半島最南側に「脇本城」を訪ねる。小山を登って、標高百米の平山城（戦国期）をみる。城域四百米×五百米、公園化されていて、日本海がよく見渡せられた。

この情景は

波寄る湾を見下ろす脇本城名残の桜タンポポの野辺

山本紀美子作

鳥海山が見えるのではないかと探す。出発間際、阪田さんの指摘で車の前方湾の上方に靄の中にしつかり雪を頂く鳥海山が幻のごとく見えた。うれしかったので、思わず出発前のナビ設定に忙しかった山本さんに報告する。ここから秋田市までは30kmだ。

⑫秋田城は国指定で丘城、城域五百五十米×五百五十米、築733年（天平5年）天平時代の政庁跡として発掘され整備されて公園となり、鳥瞰模型まで屋外に展示されている。

⑬「久保田城」は秋田市千秋公園内にあり、平山城は、城域五十米×六十米、千六百年創設、今は公園化されているが、城跡の形を残している。

これより角館市へ移動57km。

途中道の駅「協和」で遅い昼食、稲庭うどん、を食す。地元名産だ、麵に適度のコシと粘りが喉越しに美味しかった。

角館は東北の小京都と言われ、武家屋敷の並ぶ道の両側にシダレザクラがあり、町内には400本ある内百六十本が天然記念物で、樹齢三百年以上の古木もある。

⑭角館城、

平山城、城域六百米×百米、高城、中城、空堀あり、古城山公園となっている。百米は登った。道両端に陽当たりが良いのか立派な蕨が伸びており、思わず二束も持ち帰った。

城の南側より、院内川と合流した檜木内川が南流して、角館町が一望に見渡すことが出来た。

武家屋敷を徐行中、屋台「おばさんアイスクリーム」を見つけ皆が食べた。

これより本日の温泉・宿に向け90kmの移動開始。

国道105号を南下し「大曲IC」で秋田自動車道に入った。横手JCTで湯沢横手道へ入り「湯沢IC」を出て、国道小安街道を南下した。

栗駒山（1627m）の西麓・皆瀬川最上流の山間部に噴煙が至る所に上がっていた。大湯温泉が見えてきた。

奥小安峡の大湯である日本秘湯を守る会に属する一軒宿「阿部旅館」に着いた。

開湯は文化年間。館内の男女別温泉と、川の流りに沿って側に露天風呂の天然川風呂・せせらぎの風呂・河鹿の風呂があった。

泉質は硫黄泉、泉源温度97℃と高温度である。スリッパは使わないで床は黒びかに清掃磨かれてあった。山菜料理が主体であった。

日本海側の朝日岳に咲く白根葵の紫色の大形四弁の花が、玄関脇には自生していた。
本物の秘湯にふさわしい環境、温泉でした。

5月16日(月) 晴れ

昨日予定残しの横手城へ向かう。小安街道を北上、「こまち湯つくりロード」に入る。途中小安岳、山伏岳の北山麓に有名な泥湯温泉を見物した。

奥山旅館、小椋旅館他一軒だけの谷間の温泉、秋田県湯沢市高松字泥湯沢²⁵。泉質は硫化水素泉で、白く濁っている。内湯は単純硫黄泉、一帯は硫化水素の臭いが漂っていて足湯もあった。山本さんは丹念に山手側に回り、各露天風呂を(入浴者はいない)探索していた。

更に奥地に進み高度を上げて峠に着いたところが、川原毛地獄だった。駐車場(60台)の先は残雪のため通行止め。ここで全体を見通すことが出来た。硫化水素の臭いがあたりに立ち込み、草木の生えない灰色の山肌の至る所に蒸気を噴出し、鼻をつく硫黄臭が漂っている。

賽の河原がある、どこかで見た風景だ。

川原毛地獄山は青森県の恐山、富山県(越中)立山と並ぶ日本三大霊地の一つであることを知る。(恐山は、私達家族五人が二ヶ年間青森県下北半島むつに住んだ裏山で、よく行ったところである。三井造船から日本で最初に作る原子力船むつ建造に携わった)大同2年に同窓和尚が開山したと伝えられる。標高八百米、道路閉鎖期間(通常)11月上旬〜5月上旬。

今回は時間の都合で行けなかった川原毛大湯滝は、川原毛地獄駐車場より徒歩15分で行けるところにある、滝そのものが温泉という日本一の「滝の湯」である。1km上流で湧出する温泉が泥水と合流し、20mの高さから流れ落ちる。滝壺や溪流は、すべて天然の露天風呂だ。入浴適期は7月上旬〜9月中旬、入浴の際は水着着用。
ここから引き返し、須川ICへ出て、湯沢横手道を横手ICへ進む。

⑮横手城

横手市横手公園となっている本丸跡、二の丸跡を歩き横手市内を睥睨する。城域五百米×壱千米、標高百米。

横手ICから秋田自動車道を東進、岩手県に入る「北上江釣子IC」で北上市に入る。早めの昼食をとる。

⑩高館

北上市内にある。丘城で城域三百四十米×百五十米、戦国時代創建。丘に近づくが取り付く場所がわからず、そばの農家に聞くも戦時中、上の方で畑を作っていた記憶がある程度で城址かどうかは知らないとのことだった。なんとか畑への道を藪漕ぎ（道はなく雑草木を掻き分け坂を登ること）で登る。曲輪跡、堀、土塁が一の台から五の台までおぼろげに確認できた。平田さん、農家に寄り御礼とともに高館の資料を渡す。

北上市から東に釜石秋田自動車道を47km向かい遠野市へ進む、この道の先は津波被害の釜石、大船渡に通ずる。

遠野市は北上高地の中南部に位置し、四方を山に囲まれている。柳田国男著『遠野物語』で知られている。

⑪遠野城（鍋倉城）

遠野市民会館裏手の鍋倉山全山が鍋倉城跡である。

山城である。城域は四百米×三百米と広い。深い青草の本丸跡をそぞろ歩きする。土塁は地震の為地割れし、土砂崩れ寸前だ。ブルーシートが応急的に覆われている。戦国末期創建。今度は西方向の内陸へ引き返し、50km進んで花巻市へ入る。

⑫花巻城

別名鳥谷崎城である。花巻市内の平山城は、城域六百四十米×五百米、室町〜戦国期創設。

花巻城は市中心部より北上川縁に伸びた広大な台地一帯を占めていたが、旧城内には市役所ができ、繁華街、住宅地、工場敷地など市街地となっている、本丸跡、堀がわずかに残っているのみ。

本日の温泉・宿は、秘湯・鉛温泉「藤三旅館」（花巻市鉛字中平75・1）だ。

奥羽山脈の中腹、花巻南温泉郷・鉛温泉唯一の一軒宿、藤三旅館である。豊沢川畔昭和16年建築ケヤキ造り三階建て。日本秘湯を守る会と新日本百名湯の宿でもある。最後の宿にふさわしい。

館内には五つの温泉あり、すべて源泉100%かけ流し。泉質単純温泉・アルカリ性単純高温泉、源泉温度57℃湯量は豊富。その中の一番は新日本百名湯にえらばれ、日本一深い自噴天然岩風呂の「白猿の湯」で、天然の岩をくりぬいた深さ1.25米の立ち湯風呂。身長の低い私は湯が顎まで来た。

〔桂の湯〕は、桂の木の根元から湧き出たという鉛温泉の由来から名を取った。豊沢川のせせらぎを湯船に入り、ま近かに聞く野趣溢れる風呂だった。〔河鹿の湯〕はガラス面を広く取った湯治部建物の中にあり、廊下には被災地新聞、連絡ガリバン刷。湯船にも被災地からの人が入っていた。

〔白糸の滝〕白糸の滝を目の前した展望半露天風呂。〔銀の湯〕貸切利用もできるバリアフリーのこじんまり

した風呂で、早朝に入浴した。他二名が入っていた。この温泉はこれまでの温泉の中の、王様である。
この旅の最後の晩餐、皆さんに感謝の気持ちを含め、北東北の古城と温泉を巡ったお礼に・・・中国唐三大詩人の一人李白の七言律詩「金陵の鳳凰台上に登る」を吟ずる（藤川）

鳳凰台上鳳凰遊

鳳凰台上鳳凰遊ぶ

鳳去台空江自流

鳳去り台空しくして 江自づから流る

吳宮花草埋幽徑

吳宮の花草は幽徑に埋もれ

晉代衣冠成古丘

晉代の衣冠は古丘と成る

三山半落晴天外

三山半ば落つ晴天の外

二水中分白鷺洲

二水中分す白鷺洲

總為浮雲能蔽日

總て浮雲の能く日を蔽うが為

長安不見使人愁

長安見えず 人をして愁しましむ

注・江＝長江

吳宮＝金陵（現在の南京）に都した三国時代の吳の宮殿
花草＝花や草 幽徑＝静かな暗い小道

古丘＝古い丘、墓 三山＝金陵の西南にある長江に臨み南北に三つの峰が並ぶ
浮雲＝浮き雲、ここでは邪臣 日＝ここでは玄宗皇帝

意解 金陵の名勝鳳凰台を訪ね、昔の栄華のはかなさを感じ、今も変わらぬ自然の美しさに感動し、長安を追放された身を嘆く詩

朗々と吟じ給へる君の声夜のしじまに響きゆきたり

山本紀美子作

洋の東西問わず、城には人間の怨念が渦巻いている。

5月17日（火）晴れ

8時35分出発 最後のドライブ 田舎道を名残惜しくエコドライブ。

⑱高水寺城

平山城、城域は五百五十米×七百米で、1335年創設、盛岡市紫波町の町指定公園である。

⑳盛岡城

城域は七十米×五十米で標高143米、比高15米を上がる、平城は国指定で石垣が見事だ。公園化され、近郊の

高校生（男女）が大きなキャンバスを抱えて城内の対象物を選び熱心にスケッチをしていた。若い先生が生徒たちを見守っている、新緑と石垣が印象に残る。

紅の八重桜咲く古城跡君に あとも 率はれ歴史訪ふ旅

旧き友集いて巡るみちのくは地震のあととて人影少なし

山本紀美子作

昼食は、岩手名物「わんこそば」。盛岡市盛岡駅前通りの東屋に立ち寄る。古城評論家の平田氏と倉橋氏が「わんこそば」に挑戦する。若いウエートレスの掛け声で、噛むのでなく飲み込む。それぞれ52杯、100杯で証明書を貰い、倉橋氏は記念品までもらう。盛岡駅で解散しそれぞれの帰途についた。

2月に計画立案された北東北の古城と温泉の旅は無事、楽しく終了しました。ここに山本さん、平田さんに感謝申し上げます。山本紀美子夫人参加のこの種の旅に参加できたことは、藤川には初体験でした。今までの男性のみの環境下では皆無だった、情緒豊かに八首の歌に見られる各情景、感動がよみがえり、良き旅の記念になりました。ありがとうございました。

平成23年5月



写真制作 山本